

近江の懐をめぐる 9

美術家／成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川 亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's "Futokoro": Part Nine

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi, I will examine "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions: "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは、近江（滋賀県）の風土に根ざし、未来社会へ向けてものづくり、新たなライフスタイル、伝統の継承などを実践し発信している人々と、それを支える近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業^{なまわ}」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを目的としている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神、次世代につなげる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二六年一月現在まで三十五回の連載が継続されており、二〇二五年一月より二〇二六年十月まで第三十二回から第三十五回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

九回目となる「近江の懐をめぐる」研究に取り組

んだ二〇二五年度は、自身の新たな「さまよい」が始まった一年と言えるかもしれない。話は少しそれが最近、テレビ視聴が以前と比べ億劫になってきた気がしている。テレビ世代の私の家ではいつでもテレビが点いており、何となくその場を賑わす存在であった。そんなテレビが何となくさく感じ始めたのは年齢のせいだろうか、「見たくない、聞きたくない」と思うことが増えたように感じる。確かに自身の興味関心のあるコンテンツは、視聴したければいつでも動画共有サービスなどから視聴できる時代になった。自身が欲する情報やコンテンツは検索しなくとも「これでしょ！」と言わんばかりに目の前に提示される。気を抜いていると自身にとって好都合と思われる情報をいつの間にか掴まされるのだ。一方で二〇二〇年以降、コロナ禍、自然災害、気候変動、戦争など様々な社会課題と対峙せざるを得ない日常である。そんな現実を絶えず直視し続けるのも困難だ。このようなことを一人で考え、堂々巡りを続け急速回転する社会の渦に吸い込まれていきそうだ。

近江の先人たちは、おそらくいつの時代も渦中に巻き込まれそうになりつつも、湖国の風景に支えられ自身のスタンスを保ってきたのではないかと想像する。隣国に都を置き、変動する予兆を感じながら、

今日まで絶妙なバランスを保持してきたのだろう。二〇二五年は独自のスタンスで今日社会との関係に距離をとり、持続させる「場」に焦点を当てた。

はじめは湖西、比良山系の麓、木戸地区に位置するカフェに迫った。長らく隣国の都でカフェ文化を牽引したオーナーによる次なる新たな居場所の提案である。琵琶湖を一望できる平屋の古民家を、地元に移住した若手建築家と手入れして再生させた空間である。次に訪れたのは重要な文化的景観として知られる高島市大溝地区である。歴史を感じさせる街並みであるが、近年、空き家の増加が地域課題となっている。地元で建築設計施工を生業とする企業が、本社の隣の空き家をその再生活用モデルとして提案する試みに着目した。年に一度地域で開催されるマルシェに積極的に参加するなど、場の提案のみならず現地人であり当事者として、関わり続ける姿勢に注目した。三番目は近江八幡を拠点に全国展開する老舗菓子舗の新たな試みである。今や滋賀を代表する観光地の一つとなった店舗は、地域の風土と一体となり、生業を通してあるべき未来社会像を提案していると言えるだろう。前編では店内を彩る茶花ちやばなの制作現場から背景にある八幡山との景観形成までの試みを、それが老舗菓子舗を支える精神性であることとを紹介した。後編では敷地内で始まった有機農法の試みからサーキュラーエコノミーの実現を目指す姿を、生業と研究の実践と両立、そのトライアンドエラーの現場に着目した。老舗菓子舗が、地域と共に歩む未来社会を見据え、それを築くための準備と

捉えた。

二〇二五年もそれぞれのタイトルを場所の特異な事象と背景にある現地人の活躍を意味するものとした。土地（場所）の特性、条件によって臨機応変に対応する人々の気質に加え、その態度や姿勢、責任感を描写した。

一、新しい居場所

逃げ込む場所、隠れる場所、少しの間だけ関係を断つ場所が必要である。思い返してみると小学生くらいからだろうか、そんな場所をいつでも探していたような気がする。家から、学校から、仕事場から、人間関係から、社会から……。誰かに教えてもらうわけではなく自然にやっていたこと、むしろそのような居場所をどれだけ持っているかが窮屈な社会を生き抜く術のように考えることもできる。自転車に乗る行為も移動はしているが乗っている時間が居場所なのかかもしれない。その最中に新たな居場所を発見することが多いのも自身が「逃避モード」に入っていると言え。自宅から北へ琵琶湖を右手に見ながら一時間ほど走ったところ、ちょうど休憩がしたくなる頃に現れる居場所を紹介したい。

Doji (ドジ)

JR湖西線蓬萊駅あたりから湖岸を走る道がある。守山大津志賀自転車道線という名前の通りサイクリングにびったりな道である。左から正面に比良

の稜線を仰ぎ見、右手は琵琶湖の水平線が広がる。少し走ると木戸川と交差する橋を渡って山の方へ、木戸川沿いの林道を走り、国道を越えて少し登った傾斜地右手に小振りの平屋が見える。琵琶湖側は全てガラス面になっており、眺めの良さが想像できる。この近くで下宿生活する学生の話の断片に登場したのがこのカフェなのである。「最近できたドジっていうカフェがあつてその向こうに……」

私はその「ドジ」の音に直ぐに反応した。九十年代京都で学生生活を送っていた頃、課題や制作に集中できず逃げるように入りこむカフェ。中でも少し気取って特別に行く場所であった。京都北山、加茂川近くに位置する当時の呼び名「Doji-house」である。そこは普通の喫茶店とは違い、建築、植生、内装、家具、器に至るまで店主のこだわりが發揮された空間（Doji-space）だった。扉を開けると大きなテーブルが目に入ってくる。そこには色とりどりのフルーツがどさつと並べられ、華やかな気分を迎えてくれる。そして西欧製だろうかクラシカルなテーブル席やバリ製の無骨で不思議な形のテーブル席など、様々な席から選びだし「スッ！」と腰をかけるのだ。工夫を凝らしたメニューで人々を喜ばせ、何かワクワクする場所でありつつも落ち着いた雰囲気だ。その空間でお茶を飲み、背伸びした自分に酔いしれる場所でもあった。

「もしやー」と思いつつも当時の匂いがプンプン漂う。平屋の扉を開けると、やはり見覚えのある人が仕事をしている。木製の大きなカウンター席は形

を変えて健在だ。「お好きな席へ」と導かれ、琵琶湖が見える大窓の前にデッドストックであろうかモダンデザインの椅子に腰かけた。水平線の向こうに見える三上山から湖面を経由して比叡比良の山並みを一望しつつ、「あのDojiがこんなところでよみがえってるやんか!」と心で叫んだ。コーヒーを注文すると「ひよっとして北山の店に…?」と声をかけていただいた。「ハイッ!」と即答、それから是我慢で勝手に思い出話をこちからしてしまっただ。その日は興奮状態で一旦帰途。以後季節の変わり目に何度か訪れ、二〇二四年の年末に改めて取材をお願いすることにした。

Doji店主の宮野堂治郎さんとパートナーのみどりさんにお話を伺うことができた。二〇二三年四月に開店、以前は別のオーナーがここでカフェを営んでいたそうだ。前回「やりすぎない古民家再生」を紹介したがその続編になりそうだ。宮野さんがおっしゃるにはこの「大テーブルの設置と床の変更くらいです」と。もう一つのビジネスであるビンテージもののインドネシアの家具、雑貨などの買付け、顧客依頼者から求められる空間イメージのマッチングも行っている。店内はバリのもの、和物、欧米製の家具、雑貨の組み合わせが絶妙である。以前の

「Doji-style」健在^{ひなび}でも表現しようか宮野さんのセンスが近江の鄙美^{ひなび}と組み合わせたって独自の世界観を作っている。極めつけはトイレだ。奥の方に大きな観音開きの扉が見える。そこを開けるとコバルトブルーの眩しい部屋が見えた。四角い洗面台から続く

排水経路も面白い。

さて、冷静になってその経緯を聞くと北山のお店は二〇一〇年十二月に閉店、それから三年程、伊勢、丹後など次の場所を探しておられたそうだ。パリでイタリア料理のシェフ夫婦とレストランカフェを開店していた時期もあったそうだ。休憩期間を経て十一年前にこの辺りに移住。「住まいは湖岸で、店は山で」という構想で二〇一七年頃、琵琶湖の見える場所を探していたところ、今の場所にたどり着いた。決断後、店舗の近くに鎮座する樹下神社でお参りをしたところ、私と同じく北山の「Doji-house」を居場所としていた客で、数年前にこの辺りに移住した建築家岡山泰士^{おかやまのし}さんと再会したことをきっかけに、話はとんとん拍子に進んでいった。岡山さんによって図面が引き直され、古民家の魅力を活かし、床とビンテージチーク材のテーブルの新設に留めた新生「Doji」が生まれた。

その名は「ドジな僕ら」と堂治郎さんの名前がかかっている。店を出る時に「ひよっとしてこの扉?」とつぶやくと「そう!北山の時の使ってますよ」と堂治郎さん。いただいたコーヒーの黄色いカップアンドソーサーも北山の時のものだったことを思い出した。



写真5 家具、雑貨の組合せが面白い「Doji-style」



写真3 店内より一望できる近江



写真1 琵琶湖の見える居場所「Doji」



写真6 宮野堂治郎さんとみどりさん、岡山泰士さん(左)



写真4 チーク材のカウンターテーブルと床



写真2 見覚えのある人が仕事をしている



写真8 バリのテーブルとコーヒー



写真7 極め付けの居場所(トイレ)



写真9 見覚えのある扉

二、新しい居場所二

居場所の定義は難しい。逃げ込む場所、隠れる場所、少しの間だけ関係を断つ場所などと書いてはみたが、それでカバーできているだろうか。否、やはり誰かと何かを共有できる場所こそが居場所ではないだろうか。人は一人では生きていけないのだ。一瞬の間、退避しながらも、その場に一人で居ようが誰かを意識し、つながっているからこそ、或いはそこから戻れる場所があるからこそ、一時の居場所が成立すると考える。カフェでも本屋でも休憩所でもない、目的を共有し、方向性を想像し、関係をつくる場、そんな新しい居場所を見ていきたい。

Rin Takashima (リン タカシマ)

またしても学生に導かれてたどり着いた場所であ

る。二〇二四年十月末の休日、湖西線近江高島駅を下車して街中へ、大溝陣屋総門を拠点に住民が企画する「大溝まちづくりマルシェ」と、この地で建築設計施工から空き家再生まで総合的に取り組む株式会社澤村(以下SAWAMURA)が企画する「SAWAMURA マルシェ」のコラボレーションイベントが展開されていた。駅から北東方面へ高架沿いに少し歩くと、SAWAMURA 本社が見えるが、その隣にある元自転車屋さんが今回の居場所だ。軒先の看板は「ブリヂストン自転車」の表示がそのままになっているが、店先には「作業着を着た大将」ではなく、なんとも良い匂いを漂わせ、丁寧にコーヒーを淹れる人がいる。チャットと建物の中を見ると「修理中の自転車や工具が並び」ではなく、バーカウンターにコーヒー豆が並び、壁際に書棚が設置され、スマートな雰囲気が見えた。その日は浅煎りのコーヒーを注文し、スッキリした味わいを楽しみながら退散した。二〇二四年十一月にオープンしたオープンインベーションベース「Rin Takashima」を紹介する。

二〇二五年四月末、自転車屋跡地をプロデュースした総合設計会社SAWAMURAの代表取締役、澤村幸一郎さんと住環境事業部設計担当の石原由貴さんにお話を伺うことができた。

まずは澤村さんから場づくりに対する思い、理念をお聞きした。本社の隣にあることから社のリフォームのモデルハウスを計画していたがそれだけでは面白くないと考えていたそうだ。ここは街の自転車屋さんであったことから、ちょっとした修理や

空気入れなど街の誰もが気軽に立ち寄れる場所であった。その姿を新しいかたちで具体化したいと考え、自社だけで運営するのではなく誰かと共創しながら場を醸成させようと考えついた。高島市にはこの地に魅力を感じて近年移住してくるクラフトマンやクリエイターが増えている。次に住み易さに加えて環境の良さから興味関心を持ち注目する人も増えている。そして何より自身も含めた現地人だ。「この三種類の人々が点在する中、線つながり面で広がる場にしたい」と澤村氏は熱く語る。まずは「つながりづくり」の場として京都でソーシャルインベーション企画に携わる「ケノビ株式会社」とのコラボレーションが始まる。企画も自社のみで進めず立ち位置の違うステークホルダーとの共創が面白い。また、そこには珈琲焙煎の「株式会社タビノネ」が加わり、つくりあげていく仕組みも興味深い。

次に具体的な空間づくりについて石原さんからお話を伺った。まずは一階玄関の土間空間にあるコーヒースタンド「MAMEBACO」である。ここに立ち寄る度に必ずコーヒートを注文してしまう。一杯ずつ丁寧に淹れるコーヒの香りや挽きたての味は、何となく急ぎ気味で浅い呼吸の自分を落ち着かせてくれる。入って右側には書棚が玄関から奥まで連なっている。コーヒー片手に本を見ながら気づけは奥の空間に入り込んでいる。「既存の店舗と住居の仕切りを取り除いてこの空間全体の魅力を感じて欲しいのです」と石原さんは語る。見上げれば柱や梁はそのまま残し、塗料のベンガラ色も残している。

書棚と反対側には一段上がってコワーキングスペース「LOCAL NOMAD」があり、三角形のテーブルと椅子が配置されている。このインタビュもそのテーブルを合体させて始まった。会議体の人数によって大きさを変えられる仕様だ。さらには新調した壁材は素材感を残し丁寧貼り合わせるなど、化粧板や余計な材を使用しないようにデザインされている。場所によっては土壁が残されているなど高島の古民家に残る魅力が引き立つように工夫されている。タビノネとSAWAMURA、デザインと設計施工、双方の大切に思う価値の融合がここに表現されている。書棚の基礎となっている土間も一段上がっており、よく見ると店先の窓を突き抜けてエンドは円形に仕立てられている。これも内と外をつなげる要素の一つだ。コーヒースタンドの後ろ側には天井からキラキラした透ける素材が仕立てられている。「これは中に入った時にギャップを感じて欲しかったのです。」と石原さん。さらに見上げると高島ちぢみが生地そのまま暖簾のように数枚吊るされ、時折入る風で揺れていて、玄関左側には外に突き出た階段があり、中二階のショールームにつながる。

この場をSAWAMURAだけでつくってしまわずに様々な人と関わりながらつくろうとする澤村さんの想いが伝わってきた。様々な業態、職種との共創から若手社員が積極的に発言して仕事ができる場づくりが展開されている。そしてその空気感が様々な人をこの場に招き入れる共創のための新たな居場所となっているのだ。「Rin」は自転車の「輪」か

ら新たな「わ」つながりを意味している。



写真 12 コーヒースタンド「MAMEBACO」



写真 10 大溝の新しい居場所「Rin Takashima」



写真 13 コワーキングスペース「LOCAL NOMAD」



写真 11 ブリヂストン自転車の看板を残す Rin の玄関



写真 18 右から澤村さん、石原さん、和田さん
(ブランドコミュニケーション課)



写真 16 内と外をつなぐ土間



写真 14 中二階のショールーム



写真 17 内と外をつなぐ階段



写真 15 高島ちぢみが揺れる空間

三、新しいファーム

近江八幡は「近江の懐」の最深部と言っているだろうか。

朝鮮人街道（県道二号）を北上して白鳥川を渡った小船木橋交差点より、湖岸方面へ少し進むと突如として斜め方向の道が現れる。本願寺八幡別院へと続くこの道は朝鮮通信使を手厚く歓迎したことで知られる。この道の始まりは安土城築城の際に信長が京までの道をつなぐことによる。近江は街道の国であることは言うまでもないが、この地に様々な人物、情報が集約し、いつの時代も次代の予見を想像できる場所と言える。

株式会社キャンディーファーム

この地を象徴する八幡山の麓に山から田畑へとつながるように佇む老舗菓子舗たねやとクラブハリエのフラッグシップ店「ラコリーナ近江八幡」がある。二〇一五年に開店して以来、滋賀県を代表する観光地の一つとなった。お菓子を「食す」だけでなく、それを通じて土地（場所）の歴史や空気を表現でき、お菓子だけに留まらない何かを伝えている。その特徴は自然の素材を中心とした建材で施された建築、空間に見てとれる。その代表が屋根を緑で覆い尽くしたメインショップ「草屋根」だ。ここを潜り抜けると正面に田んぼが広がり右手に銅葺屋根の本社が見える。姿形は新しいがどこか懐かしい雰囲気。イメージさせる不思議な感覚に陥る。整え過ぎず

野放しにしない庭、景観で迎え入れるこの感じは何か。たねやグループ広報室の黒川志歩さんに案内していただいた。

たねやグループはお菓子の製造販売から、その背景にある環境、食、暮らしなど近江を舞台に未来社会の在り方の新たな提案、挑戦をしてきた企業と言えるだろう。創業は一八七二年、地域の人々が前身の商いから「たねや」と呼んだことに始まる。畦道を歩き棚田のある小高い丘を抜ける小道を進むと木々の間に湾曲した平屋が見えてきた。この屋根も一面、草に覆われている。二〇一三年より「たねや農藝」としてスタートした核心部「キャンディーファーム」だ。中は土間となっており中央に水場が設けられている。そこでスタッフの皆さんが草花の手入れや管理など各々が作業を進めていた。奥の板の間で園長の木村千鶴さんに会うことができた。二人の後方の四角く切り取られた窓枠の向こう、色濃くなつていく緑が美しい。「キャンディーファームは名誉会長であった山本徳次が、仕入れるよもぎの加工工場を訪ねた時、マスクをして洗浄作業をする姿を目にしたことから始まります」。自分たちが口にする（販売する）ものがどこでどんなふうにつくられたかわからない材料であつてはならない。この地を表現できることは何か、ラコリーナが建つ以前、一九九八年によもぎを自社栽培する「たねや水源寺農園」が設立。続いて二〇〇三年には愛知川の工場横に「愛四季苑」が設立し、各店舗を彩る茶花の自社栽培が始まった。里山や野原に自生する季節

の草木や花などを育て、たねやの思い描く近江の自然を表現している。二〇〇九年より八幡山の森とラコリーナの景観の一体化を夢見る「どんぐりプロジェクト」が始まる。それは十万本の植樹を目指し現在五万本まで達成している。木村さんより日々の取り組みを伺った。茶花づくりと展示を軸に据え、有機農法による野菜や米づくり、八幡山とのつながりをつくる景観管理、野草（在来種）の管理、昆虫の生態系回復、お菓子を製造する際に発生する有機汚泥を活用する循環堆肥の試みなど、仕事の幅が広がり話は営みへと膨らんでいく。キャンディーファームのすべての活動は地域全体の環境、景観づくりの活動につながっていると気付いた。

さらに話は近江八幡と琵琶湖をつなぐ水郷とヨシ群生による文化継承に移っていく。ヨシ刈りから地域の伝統であるヨシ松明づくりへ。春の五穀豊穣を祈る松明まつりでは、市内の各地区で様々な形や大きさの松明が揃う。自然と共に生き、支え合ってきた地の民によつて育まれた文化である。地域の学生を巻き込み一緒につくるなど、近江の祭と銘打ちラコリーナ内のイベントとして定着している。これは地域伝統の継承とつながりの学びが一体化している。「自然に学びながらさまざまな人やものを受け入れることからかな」と木村園長。

また、ラコリーナの道向かいにある田んぼにて他社企業や大学と一緒に手作業での田植えや稲刈り体験を行い、新たな生業や学びのつながりをつくっている。黒川さんは「実はラコリーナの敷地内に

ある田んぼでは、入社二年目の社員全員がこの田植えを体験します！」と話された。この体験が後々、社員の糧となるようだ。自分たちが販売するお菓子の原材料がどのようにしてつくられるか、お客様に對して身をもって伝えることができるのだ。今日の社会では効率重視のサプライチェーン化が横のつながりを見えにくくしている。生産からサービス、さらには企業ビジョンに留まらない目的の提案がこの場所でも育まれていると感じた。「この経験があるから一緒に仕事をしている人たちは同じ方向を見ていると思う。」と木村園長。ここに辿り着くのに、様々な挑戦と失敗をしてきているのだろう。ものづくりには失敗がつきものである。失敗を恐れ、失敗してはいけない今日社会に対し、人との関わり、自然との関わりを追求する企業、ファームであるからこそ「挑戦と失敗の最先端」を歩めるのであろう。二〇二三年より農芸部門の社名をキャンディーファームとした。お菓子屋さんの農場を意味している。「時代の中で成長しているか戻っているかわからないですわね！」と二人は向き合った。



写真 23 小道の向こうのキャンディファーム



写真 21 ラ コリーナ近江八幡内の田んぼ



写真 19 銅葺屋根の「たねや本社」



写真 24 木村園長と黒川さん（広報）



写真 22 小道の向こうのキャンディファーム



写真 20 たねやを彩る茶花

「失敗は成功のもと！」と何度も親から励まされたことを思い出す。
小学二年生頃であろうか、初めて釣り道具を手にしたのだが、竿、釣り糸、ウキ、針、オモリなどバラバラで買ってもらい、魚釣りの仕掛けを自分でつくるように言われ、悪戦苦闘して仕掛けを作ったこ

四、続・新しいファーム



写真 27 キャンディーファームの入り口



写真 25 キャンディファームの中



写真 26 キャンディファームの中

とを思い出す。便利な初心者セットは販売されていたが、必要なものだけを買えばいい、その後、必要に応じて自分の小遣いで買い足していった記憶がある。竿先に糸を結びつけるだけでも最初は時間をかけてやっと取り付けることができた。漸く仕上がった仕掛けを釣り場を使うのであるが、竿と糸のバランス加減がつかめず、アツという間にオマツリ（糸が絡まる）状態に。すぐさま現場で仕掛けを作り直すのだが、気づけばすでに陽が落ち、釣りどころではなかった。そうやって何度か釣り場でさまざまな失敗を繰り返して、魚一匹を釣り上げるのに半年はかかったことを思い出す。振り返ると、魚が釣れだす頃には、仕掛け作りや釣り場の見定め、段取りなど様々な条件をクリアできるようになっていた。

続・株式会社キャンディーファーム

さて、前回に続き、菓子舗たねや・クラブハリエの農業生産法人キャンディーファームを再見したい。前回取材時に炎天下の中、農地で作業をする若いスタッフがいた。「挑戦と失敗の最先端」という締めで終わったが、正にその最中の当事者と直接対話したいと思い再訪した。その人、鬼海航太さんにお話を伺った。開口一番「いやあ、ほとんど失敗ですよ！」と苦笑いしながら話し出した。入社して六年目。最初の三年は販売職に、お客様やスタッフと対話しながら自身の立ち位置を知る。そして希望するキャンディーファームに配属され現在に至る。

東京の農大で昆虫を研究対象とするバイオミミク

リー（生物模倣学）を専攻していた。研究の一つ、カプトエビ農法は雑草の新芽を食べることにより除草効果が期待できるのだが、減農、無農薬での稲作は、カプトエビの生息を見ることが環境の健全性を示す指標となっている。このような実践と研究を学生時代の恩師と、近江八幡の地で研究できたことが「お菓子を製造するだけの企業では無い！」と、たねやグループ入社へとつながっている（現在もここで恩師と共に大学と企業の共同研究が継続している）。

入社してすぐに「製造・販売・農業まであるこの会社でそれぞれの専門分野を極めよ」との社長の言葉が今でも精神の下支えになっている。はじめの経験として、ラコリーナ内の園路舗装の話から始まる。これは一見、田舎の畦道を想起させるが訪れた人が歩きやすく且つ、背景の八幡山との景観が考慮されていることがわかる。コンクリートと真砂土が絶妙なバランスで調合されている。最初は施工会社の職人の手により整地されたが、その後は自分たち社員の手により修繕されていくのだ。土や水の分量が多いと崩れやすくなるなど、直ぐに上手くいくわけではない。その日の湿度などにも影響され、日々面倒を見ながら「手入れ」する自然との対峙が始まっているのである。その目線で園内を見ていくと、草屋根の雨どいや柱など至るところで手入れが日々されていることに気づく。逆に通常の建材はこれらの経験値からメンテナンスが容易で安価、効率がよく消耗品の取替が効くようにつくられているのだ。そ

うではなく、わざわざ面倒な方を選んでいくところ、訪れる人の見えるところで日々作業を行うところも面白い。次に敷地内の田んぼで実証を行うアイガモロボットの話である。減農、無農薬の稲作は日々の除草が戦いのメインである。ラコリーナでのアイガモロボットによる除草は二〇二四年から始まった。最初の年は水嵩が足りなかったことにより、除草が効果的に進まなかったそうだった。二〇二五年は田起こしの段階から水嵩を一定に保てるよう深くしたことにより、除草作業はうまくいった。さらにアイガモロボットの除草作業には水と土を攪拌する作用があり、そのことによって水田内に酸素が送り込まれ、栄養を供給してくれる微生物の活性化につながり、収量増加へ導く結果が得られたそうだった。機械導入は一見、農業の工業化を想起させるが、人間の「手入れ」の範囲、知恵や工夫は数値やエビデンスとは違う結果と恵をもたらすのだ。

この他、ナノバブル（超微細気泡）農法の研究と実践も進めている。その効果は土壌への浸透性が高くなること、作物の栄養吸収を助けるなど、収量、品質の向上が期待できる。キャンディーファームで収穫される作物が即座にお菓子の原材料となり、収益につながるわけではない。しかし農地を保持しながら活動を続けることで近江八幡の景観保全や、リスクの高い減農、無農薬農業のトライアンドエラーによるデータ蓄積、大学との共同研究など地域企業にしかできない役割を果たしていると言えるだろう。



写真 28 ラ コリーナ内の園路



写真 29 田起こしからやりなおした水田



写真 34 ラ コリーナ内の農地



写真 35 ラ コリーナ内の農地



写真 32 八幡山と一体化するラ コリーナ内の景観



写真 33 畦道に立つ鬼海さん



写真 30 鬼海航太さん



写真 31 キャンディーファームが保持している農地

近江八幡でやる拘り、大規模農業とは違うやり方でこの地を蘇らすことなど「このような技術的検証をたくさん試みることで農業従事者を増やすことができれば」と鬼海さんは夢を語る。ラ コリーナを訪れる人々のことを考えることから話は始まり、近江八幡の景観やこの地を持続させる話へと大きく話は膨らんでいた。

このような思いや考えが生まれるには、地域の企業、行政、連携する大学、そして文化的景観第一号をもつ近江八幡の持つポテンシャルの高さであろう。前編の最初に戻るが庶民の信仰のよりどころである本願寺八幡別院が存在することも、為政者が統治することのできないコモンズがこの地を持続させていることを証明しているように思う。

追記

紀要の冒頭は、二〇二六年、年始の自身の心境と二〇二五年の活動を振り返りながら思いを書き綴ってみた。テレビ世代の私が正月番組においてその気分を味わう余裕がなくなってきたことに気づいた。情報とは、とるべくして自身がとりに行くものと、何となく目の前を流れ見聞きするものがあるだろう。ここでは後者を受け入れにくくなったのか、興味関心の薄い情報も何かのキーワードが切欠となりつながっていないかった事象と関係する可能性がある。その気づきが新たな考えの発生や、これまでの蓄積とつながることが気持ちよかった筈である。もしや自身にとって都合の良い情報しか受け入れられない状況にあるのか、とも考えてしまう。現実を直視する苦しさあまりに、自身の興味関心に寄せた情報ばかりを受け入れ、都合よく解釈したいものである。

二〇二五年の「近江の懐」は流布される情報と絶妙な距離を置き、他人事を自分ごとのように思い込んで大きな渦に巻き込まれることなく、本当の自分ごととは何か、それに向き合おうとする個人、地域、企業の有り様に迫った。二〇二五年末には厳しい現実も耳にした。大溝で紹介した共創スペースのコーヒースタンドが十二月末をもって撤退を決めたそうだ。全国のあちこちの地域に広がりをもせるコーヒースタースタンドは、その地域の独自性と呼応して安堵のひと時を生み出している空間だ。実際、

私も様々な地域を訪れた際にハンドドリップで淹れるコーヒー店を探し、コーヒーを飲みながら地域の生情報を入手している。コーヒーは人々と地域を結ぶ大切なエレメントといえるだろう。このような場は目的の有無を問わず誰もが立ち寄れる「居場所」であり、そこは新たな切欠と想像を生み出す「ファーム」であるのではないかと考える。撤退を決めた理由はいくつかあるだろうが、この試みは始まったばかりであり、地元の企業が設定した相互乗り入れができる仕組みが重要だ。空いた場所にまた新たなステークホルダーが参入できる可能性を残し、現実としての「場」を設けることで様々な立ち位置の人間が関われる可能性をつくっている。

さらに付け加えるなら、このような場を応援しながら存続できるような空気をみんなで作っていくことだろう。近頃は目的が無くとも、何気なく立ち寄れる場所、立ち寄っても許される場所の存在が、今後さらに重要視されるのではないかと考えている。

